

戦後大阪における在日コリアンの事業活動

— ケーススタディを通じて —

石川 亮 太

近代関西経済の発展とアジア・アフリカの国際関係史研究班 委嘱研究員
立命館大学 経営学部 教授

この報告では大阪の在日コリアン二世による企業活動の事例として、僑文社（現・ケイビーエス株式会社、大阪市生野区）の草創期（1968～77年頃）を取り上げた。

僑文社はもともと在日大韓基督教会の韓国語印刷物を制作することを主な目的として1960年に設立されたが、1968年に高仁鳳（1941～2012年）がこれを買い受けた。高仁鳳は急速な設備投資によって数年のうちに手動写植からオフセット印刷に至る一貫生産体制を構築し、在日コリアンの集住する生野区の主要道路沿いに店舗を構えるに至った。

この時期の僑文社の主な顧客は大阪の在日コリアンであり、日本生まれながら少年期（1947～57年）を韓国で過ごした高仁鳳は、高い韓国語の能力とページ物の制作が可能な技術・設備能力を活かし、民団や領事館、在日大韓基督教会、民族学校など、主に韓国系の各種団体から印刷物の制作を受注するようになった。一方で顧客のすそ野を在日コリアンから広く一般消費者に拡大するため、安価・迅速な制作を謳う「印刷ショップ」の業態を展開しようとするが、印刷工程の高コスト性から必ずしも成功しなかった。

印刷言語の面では、僑文社では韓国語と日本語の双方の印刷に対応しており、同じ版の中で日本語と韓国語を併用する混植も行っていた。1970年代には、そうした韓日混植印刷の需要が在日コリアンのコミュニティに止まらず、外部の日本社会にも拡大する兆しが見られるようになった。こうした変化は、1980年代からの僑文社が組版から印刷までの一貫生産を放棄し、組版工程の高度化＝多言語同時組版に特化した戦略を選ぶ背景となった。

技術的に言えば、1980年代から90年代初めにかけての僑文社・ケイビーエスは、電算写植システムの導入をはじめとする電算化、さらにマッキントッシュ（Mac）によるDTP組版への移行という、大きな変化を経験した。電算写植システムの導入によって大量のテキストの処理が可能となった同社は、在日コリアンの顧客に加え、東京の大手出版社等から一般市場向けの書籍や雑誌の組版を受注するようになった。さらにMacの導入によって韓国語以外のアジア諸言語を含む多言語同時組版が可能となり、外国人訪日客や居住者をターゲットとした制作物も手掛けるようになった。これは技術的な可能性の広がりに加え、日韓交流の深まりや、日本社

会の内部における多言語状況の出現に伴う市場の変化に対応したものであった。こうした僑文社・ケイビーエスの歩みは、エスニック・マイノリティの企業が同胞のコミュニティを超えて市場を開拓し、成長していった事例として意義深い。

僑文社・ケイビーエスの成長を可能とした内部的条件として、経営者高仁鳳が日本生まれの二世として在日コリアンのコミュニティ内部に足場を置きつつ、日本敗戦後の10年程を朝鮮半島で過ごし、韓国語の運用能力とともに日韓両国の社会を複眼的に見る姿勢を養ったことが挙げられる。高仁鳳が多言語化を選択していく過程で、日韓両国の印刷業界の発展径路の違いに気づき、韓国からいち早く新規技術を導入するのに成功した背景には、こうした彼の個人的な経験があったといえる。在日二世の企業活動は、その生活における多様な経験を強く反映したものであったのである。

なお本発表と要旨は、拙稿「1960～70年代の大阪における在日コリアン印刷業」（『立命館経営学』61巻2号、2022年）、「ハンゲル専門印刷から多言語印刷・翻訳業への展開」（『同』61巻4号、2022年）に多くを依拠している。関心のある読者はこれらを参照されたい。

戦後大阪における在日コリアンの事業活動 ーケーススタディを通じてー

2023年7月19日 関西大学産業セミナー
石川亮太（立命館大学経営学部）

1

はじめに

- 大阪の在日コリアン [杉原1998、福本2022]

1910年 韓国併合から増加 1930年代 出稼ぎから定着へ
とくに済州島からの渡航者が多い（1922年 阪済定期航路）

大阪市 1928年 35,017人 対総人口比 1.6%
1942年 317,734人 対総人口比10.4%

1945年 日本敗戦／朝鮮解放による大量帰国・新規入国の停止

大阪市 1947年 58,340人

1980年代～ ニューカマーの増加 *89年 韓国の海外渡航自由化

2

はじめに

- 大阪における在日コリアンの就業 [樋口2010、韓2012]

戦前：職工中心 必要なスキルが相対的に低い／労働の強度が高い
ガラス、鉄工、鑄造・メッキ、ゴム、メリヤス、染織・縫製
資本を蓄積して零細業主として独立する者も現れる

戦後：自営業を含む業主比率が高い（少なくとも20世紀末まで）
大阪は製造業比率が高い：金属・プラスチック・ゴム・繊維など
集住地区（生野・東大阪）の「町工場」が代表的
高度成長の終焉後はサービス業化が強まる

3

はじめに

- エスニック・ビジネス研究と在日コリアン [樋口2010、2012]

エスニック・ビジネス＝ある社会のエスニック・マイノリティが営むビジネス。その内容はさまざま・時代によって変化

民族固有の財やサービス（エスニック財）を提供するか否か
市場がエスニック・コミュニティの外にあるか否か etc.

在日コリアンの場合：

例1）キムチ製造 エスニック財／コミュニティ内→一般市場

例2）パチンコ 非エスニック財／一般市場

在日外国人は統計上「見えない存在」→研究の不足

個別事例の積み重ねが求められるゆえん

4

はじめに

- 事例：高仁鳳氏（コウ・インボン、1941～2012年）

在日2世として大阪市に生まれる

1968年 印刷業・僑文社の経営者となる

1989年 法人化・ケイビーエス（株）

2004年 社長退任、会長

同胞向けのハングル・日本語印刷からスタート

外国人住民を含む一般顧客向けの多言語印刷へと展開

→事業内容の変化と背景（技術・市場）に注目

※石川2022a, 2022bをもとに

5

1. 高仁鳳氏について

- 略歴：経営者となるまで [高・石川2023]

1941年 大阪市此花区で済州島出身の父母のもとに生まれる

1947年 母・兄と朝鮮全羅北道裡里に帰国／父は残留

兄の従軍と母の死去 →ソウルで働く（54～57年）

1957年 大阪の父のもとに戻る

白頭学院建国中高等学校（住吉区）編入

1962年 高校卒業後、業界紙記者や民族団体職員などで働く

大阪経済大学経営学部二部入学（1963年）

1967年 林芳子（イム・バンジャ）氏と結婚

在日2世、大阪市東淀川区に生まれる

大阪市の公立学校を卒業、会社事務（文書校正等）

1968年 僑文社を買い取り経営者となる

6

2. 草創期の僑文社（1968～70年代）

- 僑文社の創業

1959年 在日大韓基督教会西成教会の構内で創業

教会信徒による個人事業、ハングル・日本語の活版印刷

教会機関紙『福音新聞』（韓日混植）ほか韓国民団や個人顧客

- 高仁鳳氏による引き継ぎ

1964年から断続的に勤務

1968年 買い取り 機材と商号 *土地建物は教会所有

1969年 生野区鶴橋南之町（現桃谷）の自宅に移転

1977年 生野区勝山北2丁目に移転（現在地）

- 従業員

主に在日韓国人 1977年当時8名（高仁鳳氏・林芳子氏含む）

流動性が高い→次第にスキルを持つオペレーターが定着

7

2. 草創期の僑文社（1968～70年代）

- 設備と技術

当初は活版印刷 文選から印刷まで ※ハングル活字業者は存在

1972年 手動写植機の導入

- ガラス板上の文字を印画紙に焼き付け版下を作成（組版）

- 1970年頃から日本の写植機メーカーが韓国向けのハングル文字盤を発売→多くの書体が利用できるように

- 印刷工程は別の機械を要する（オフセット機）→外注

1970年代後半 印刷まで内製企図→失敗→組版業務の高度化へ

- 多段階の分業で成立していた当時の印刷業

8

2. 草創期の僑文社（1968～70年代）

- 初期の制作物と顧客（1969年）

おおむね大阪市内。府内と近隣府県が若干。

- 企業・事業所 日本語が多数、日本名
- 個人 韓国名、結婚式などの招待状、韓国語が中心
- 在日大韓基督教会 日本語+韓国語（混植）
- 韓国民団・民族学校 日本語と韓国語の使い分け

在日コリアンの二重の言語生活 とくに2世代

コミュニティ内部で混植を含む韓日両語の印刷物が需要される

9

2. 草創期の僑文社（1968～70年代）

- 制作物の変化と顧客層の広がり（1970年代）

手動写植機導入による採字の効率化→「ページ物」の制作増加

在日コリアンの民族団体、東京を含む各地に拡大

- 『統一』（韓国文、東京：統一社、1972-73年）
- 『漢拏山』（韓国文、東京：済州開発協会、1970年）
- 『韓国人原爆犠牲者慰霊碑 除幕式에 이르는 [にいたる] 記録帳』（韓日文、韓国民団広島県地方本部、1970年）

日本人顧客、韓国や在日コリアンへの関心の芽生え

- 『本名を正しくよぶための人名仮名表記字典』（韓日文、朝鮮資料研究所、1975年初版・76年再版）

10

3. ハングル印刷の電算化（1980年代）

- 電算写植システムの導入（1982年）

角川書店『朝鮮語大辞典』補巻組版の受注（1981年）

電算写植システムの導入を決断

- 電算プログラムによって組版、印画紙に焼き付けて版下作成

- 日本語システム 1979年（株）写研、80年（株）モリサワ

- モリサワに働きかけ韓日併用システムの開発に参加

1982年9月 第1号機の導入（同月、ソウルにも納入）

※日本語以外の東アジア言語による電算写植システムの嚆矢

82～85年にかけて写研・モリサワの開発競争

日本国内では僑文社だけが導入、1986年までに3台体制

入力校正機のみ導入、出力はモリサワに依頼

11

3. ハングル印刷の電算化（1980年代）

- 電算写植システム導入の背景

電算システムのメリット：入力データを電子的に貯蔵し後で再編集できる＝ハングルと日本文を別途入力できる。

例）僑文社는 언제나 未来를 보고 있다.

ハングル入力ができるオペレーターの稀少性、日本語オペレーターとの分業による作業の効率化

- ワープロ入力の開始

PC上でワープロ入力して電算写植システムのデータに変換

1984 日本語、86 韓国語

変換ソフトの開発 ※高電社・高基秀（1934～2006）

入力作業を分散・効率化、写植機の未経験者でも作業可能

→韓国人ニューカマー女性（結婚渡日や留学生の配偶者）の雇用

12

3. ハングル印刷の電算化（1980年代）

- 1980年代の制作物と顧客

在日コリアンのコミュニティを超えた顧客の拡大

東京をはじめ各地の出版社・メーカー

語学関係：

- 『基礎ハングル』（月刊誌、東京：三修社、1985～87）

- 『朝鮮語大辞典』補巻（東京：角川書店、1986）

貿易・海外投資：

- 『COMPANY PROFILE』（大阪：末広バルブ、1984）

- 『신간선（新幹線）』（東京：日本国有鉄道、1985）

韓日間の文化・経済交流の活発化 *84.4 NHK講座、88ソウル五輪

韓日混植で「ページ物」組版に応じられる業者の稀少性

13

4. 多言語印刷・翻訳業への展開（1990年代）

- DTP化（Desktop publishing/pre-press）

汎用パソコン（初期はApple社Macintosh）の画面上で図像まで含めて組版する方式→組版工程の大幅な省力化

1980年代半ばアメリカで開始、1989年日本語対応（モリサワ）

- ケイビーエス（1989末に僑文社を法人化・改称）の対応

1991年Macintosh導入 92年営業利用

きっかけ：高価な電算写植システムの普及が遅れていた韓国で日本よりも先にDTP化が進展・豊富な字体開発

多言語の同時編集が可能なプログラムの開発。韓日両語だけでなくタイ語・ベトナム語・中国語など多言語化

1994年 多言語出力が可能な高精度プリンターを韓国から導入
ハングル書体30種+日・欧・タイ・アラビア語の同時出力

14

4. 多言語印刷・翻訳業への展開（1990年代）

- 制作物と顧客の広がり（1990年代）

関西地方の在日コリアン+全国の企業・事業所と公共団体

多言語制作物：訪日観光客や定住外国人の増加を反映

- 『市民防災マニュアル』（大阪市、1997年、英・韓・中（簡体字）・ポルトガル・スペイン・日文の混植）
- 『国民年金』（神戸市、2001年、韓・英・中（簡体字）・ベトナム・日の各語版）
- 『バーン・ラオ』（大阪市：ワラボラ、タイ・日文の混植）

- 制作体制

入力作業のオペレーターとして各国からの留学生を雇用

印刷にくわえ翻訳業にも展開

※技術独占の困難さへの危機感

15

おわりに

- 事業内容の変化。印刷技術の革新に加え日本における外国語印刷物の市場の変化に即応

在日コリアンコミュニティ内部の韓日文印刷物

↓

韓日文印刷の一般市場への拡大

↓

訪日・留日外国人の多様化を背景とした多言語印刷

- 高仁鳳氏。在日コリアンのコミュニティに属すると同時に青少年期に韓国に滞在、両国の印刷業界を複眼的に見ることができた。

→とくに多言語化の過程で、両国の印刷業界の発展経路の違いに気づき、新規技術の早期導入に成功

16

おわりに

- この事例の含意。エスニック・ビジネスの市場拡大の過程で、新たな顧客をホスト社会のマジョリティ（＝日本人）に求める場合だけでなく、他のマイノリティ集団の需要に横断的に応じる形で市場拡大を実現する場合があったことが分かる。
- ただし僑文社／ケイビーエスのサービスは、もともと在日コリアン・コミュニティの内部で閉じていたわけではない（韓日混植）。多言語印刷も、各マイノリティ集団内部の需要に応じるというよりも、各マイノリティ集団と日本人のコミュニケーションを橋渡しする性格のサービスであった。→このようなサービスへの需要は他にどこで発生し、どのように満たされて来たか？
- 印刷業史の視角。日本のアジア語印刷の発展において植民地支配の歴史が持った意味。また植民地出身のマイノリティが果たした役割についてさらに掘り下げる必要。例）中国語印刷。

17

参考文献

- 福本拓（2022）『大阪のエスニック・バイタリティ：近現代・在日朝鮮人の社会地理』京都大学学術出版会。
- 韓載香（2010）『「在日企業」の産業経済史：その社会的基盤とダイナミズム』名古屋大学出版会。
- 韓載香（2012）「在日韓国・朝鮮人：ビジネスのダイナミズムと限界」樋口直人（2012）後掲、所収。
- 樋口直人（2010）「在日外国人のエスニック・ビジネス：国籍別比較の試み」『アジア太平洋レビュー』第7号。
- 樋口直人（2012）『日本のエスニック・ビジネス』世界思想社。
- 石川亮太（2022a）「1960～70年代の大阪における在日コリアン印刷業：僑文社・ケイビーエス株式会社の歩みから（1）」『立命館経営学』61巻2号、立命館大学経営学会。
- 石川亮太（2022b）「ハングル専門印刷から多言語印刷・翻訳業への展開：僑文社・ケイビーエス株式会社の歩みから（2）」『同』61巻4号。
- 高仁鳳・石川亮太（2023）「ソウルと大阪の狭間で：戦中・終戦・朝鮮戦争を生きた半生を語る」『政策科学』30巻3号、立命館大学政策科学学会。※印刷中
- 杉原達（1998）『越境する民：近代大阪の朝鮮人史研究』新幹社。

18

